

感情鈍磨現象の2様態

——離人症状とサイコパシーにおける感情鈍磨現象の検討

金山 範 明

名古屋大学大学院環境学研究科
日本学術振興会特別研究員

大隅 尚 広

名古屋大学大学院環境学研究科
日本学術振興会特別研究員

飯 村 里 沙

同志社大学文学研究科

余 語 真 夫

同志社大学文学部

大 平 英 樹

名古屋大学大学院環境学研究科

問題と目的

精神疾患に表れる感情関連症状は様々な様相を見せており、どのような症状が存在し、どのように分類が可能であるのかを検討することが求められている。

離人症性障害は、DSM-IV-TR (American Psychiatric Association, 2000 高橋・大野・染矢監訳 2002) によると、「自分の精神過程または身体から遊離して、あたかも自分が外部の傍観者であるような」感覚に特徴づけられるものであるが、一方で感情鈍磨を呈することが示されている (金山・大隅・大平, 2007)。これは急性ストレス障害などにも共通して見られ、自らが受けた強いストレスに対して防御反応として現れてくる感情反応の異常の1様態であると考えられている (Apitzsch, 1996)。

感情鈍磨という現象でも、サイコパシーに現れるものは多少異なる。サイコパシーは冷酷性、希薄な感情、利己性、無責任、衝動性、表面的魅力などの特徴を有する人格障害と定義される (Cleckley, 1976)。精神疾患ではないが、嫌悪刺激に対する反応の減退という意味で (Osumi, Shimazaki, Imai, Sugiura, & Ohira, 2007)、感情鈍磨を引き起こしていると考えられる。特に一次性サイコパシー (Primary Psychopathy : 以下 PP) は、自己中心性や淡白な感情反応といった特徴を持っており (大隅・金山・杉浦・大平, 2007)、他者感情などの感情刺激に対する感受性低下として現れてくる感情鈍磨であると言える。二次性サイコパシー (Secondary Psychopathy : 以下 SP) は衝動的な行動様式に代表され、鈍磨とは異なる感情の問題があると想定される。

このように感情鈍磨という一つの現象を取ってみてもその様相は異なるが、各様相を検討した研究は少ない (Baker, Holloway, Thomas, Thomas, & Owens, 2004; Baker, Thomas, Thomas, & Owens, 2007)。よって本研究では、離人とサイコパシーに表れる感情鈍磨の異なる様態を検討する。なお本論文では、一般的に起こりうる感情が起こらない現象を感情鈍磨とする。

近年 Baker et al. (2007) により作成された Emotional Processing Scale (以下 EPS) は、精神疾患に現れてくる感情関連症状を包括的に査定する目的で作成された尺度であり、アレキシサイミアや感情コントロールの質問紙と相関があることから妥当性が保証されている。この尺度は、Rachman (1980) の提唱した Emotional Processing モデルに基づいた感情処理過程を、侵入 (Intrusion)、抑圧 (Suppression)、不協和 (Lack of Attunement)、制御不能感 (Uncontrolled)、解離 (Dissociation)、回避 (Avoidance)、困惑 (Discordant)、外在化 (Externalized) という8つの下位因子に分類して測定する。これらの項目は、感情コントロール及び感情体験に関するものに分けられ、さらにそれぞれが感情情報の入力、体験、表出という3つのどの段階で機能するのかが設定されている。このように EPS モデルでは感情処理過程に様々な側面を仮定し、それぞれの役割・影響を検討することを想定している。よって本研究では、EPS と離人傾向の尺度、またサイコパシー傾向の尺度とを併せて実施し、共分散構造分析を行うことによって、離人とサイコパシーにおける感情鈍磨の様相の違いを Emotional Processing モデルを参考に検討する。

方 法

調査対象者・調査期間

大学生を対象に、授業内で質問紙を配布しその場で回答を求めた。回答者は、回答が強制ではなくいつでも中断及び放棄することができることを伝えられた。大学生 252 名 (男性 146 名, 女性 105 名, 不明 1 名, 無効回答 21 名, 平均年齢 20.30 歳 [SD4.47]) より有効回答を得、分析対象とした。調査実施期間は 2007 年 4 月であった。

調査内容

以下の3つの尺度を全て同時に配布し、各尺度の注意事項を熟読した上で回答することを口頭で説明した。

1. Cambridge Depersonalization Scale (CDS; Sierra & Berrios, 2000)

離人症性障害において報告される体験項目 29 項目について、この半年間の間にどれほど体験したかに関して、その頻度を 0 (まったくない)~4 (いつも) の 5 件法により回答し、頻度に関して 0 (まったくない) 以外に回答した項目に関して、その持続時間を 1 (数秒間)~6 (1 週間以上) の 6 件法により回答するもの。金山他 (2007) によるものを用い、解析には頻度と時間を合計した総得点を用いた。感情に関連する項目例を以下に示す。「泣いたり、笑ったりしているときでも、自分自身の感情が心に迫ってこない」

2. Primary and Secondary Psychopathy Scale (PSPS; Levenson, Kiehl, & Fitzpatrick, 1995)

大学生などの一般人口におけるサイコパシー特性を測定するための尺度。PP 下位尺度 16 項目、SP 下位尺度 10 項目の計 26 項目からなり、「1. 全く当てはまらない」から「4. 非常に当てはまる」の 4 件法で評定する。杉浦・佐藤 (2005) による日本語翻訳版を用いた。PP, SP それぞれの項目例は以下のようなものである。PP 「成功は、適者生存の原理に基づいている。負けた人のことなど気にならない」 SP 「欲求不満になると、ブチぎれて鬱憤ばらしをすることが良くある」

3. Emotional Processing Scale (Baker et al., 2007)

感情体験に関する記述を、過去 1 週間の体験に基づいて、0 (まったくあてはまらない)~9 (非常によくあてはまる) の 10 件法により回答するもの。Baker et al. (2007) による 38 項目版を翻訳して用いた。8 つの下位尺度得点を算出し、Cronbach の α 係数を求めたところ、侵入、不協和、回避の 3 項目が .60 を下回ったため解析から除外した。解析に用いた尺度の項目例を以下に示す。抑圧「自分の感情を抑えていた」、制御不能感「人々の発言や行為に対して、私は過剰に反応した」、解離「私は自分の感情と距離をおいて超然としていた」、困惑「私は強烈な感情に恐れをなした」、外在化「食べ物が感情の原因だった」(その他 Table1 参照)

結果と考察

各尺度の Cronbach の α 係数を Figure 1 に示した。CDS や PSPS で測定されるパーソナリティが、感情反応に及ぼす影響を検討するため、共分散構造分析を行った。CDS, PP, SP を、パーソナリティ要因と捉え外生変数として、EPS を感情反応と仮定し内生変数としてそれぞれ用いた。3 つの外生変数間、5 つの内生変数の誤差変数間にそれぞれ共変関係を仮定し、外生変数から内生変数へのパスに関して有意でないものを削除した。その結果 Figure 1 に示したモデルの適合度指標が基準を満たしていると考えられたため (GFI=.99, AGFI=.97, RMSEA=.001), これを採用した。

CDS から各 EPS 下位得点に対して有意なパスを持ったのは、抑圧、制御不能感、解離、困惑の 4 つであった。この結果は、離人体験頻度の高い者は広範に感情関連の機能不全を起こす可能性を示唆している。PP からの有意なパスは、解離、外在化の 2 つに対して見られた。これは PP の高い者は、離人と同様に解離的な感情反応を見せる傾向、また感情反応を外在化する傾向がある可能性が示唆された。PP は

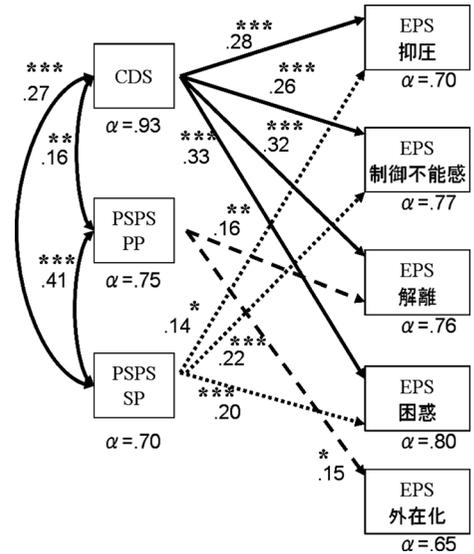


Figure 1 CDS, PSPS, EPS を用いたパス解析

CDS からのパスを太い実線、PP からのパスを太い点線、SP からのパスを細い点線で表した。EPS の誤差変数、及び各相関は図を簡潔にするために割愛した。 α は Cronbach の α 係数。*** p <.001 ** p <.01 * p <.05

共感欠如や自己中心性などの特徴に見られるように、その感情を自分の感情として受け止め、他者と分かち合うという能力に欠ける、といった知見と一致する結果であると言える。SP からの有意なパスは、抑圧、制御不能感、困惑の 3 つに対して見られた。これは SP が離人と同様の反応を持つが、その中核的な要素である解離反応を示さないことを示していると考えられる。SP は衝動性の高さを特徴としており、制御不能感、困惑などの因子と関連することはその概念と一致している。

CDS と PP には解離への有意なパスが見られたのに対し、SP には見られなかった。これは SP が PP のような感情鈍磨を示さないことと一致すると考えられる。また CDS が解離性障害の下位診断基準であることを考慮すれば解離と有意な関連があるのは当然であるが、サイコパシーにおける感情欠如性も解離反応と関連する可能性が示された。一方で、低い係数ながら PP のみが外在化への有意なパスを持っていることを考えると、離人とサイコパシーの感情鈍磨を分け隔てるものは、それを外在化して眺めるかどうかという要因である可能性がある。CDS と SP には多くの共通したパスが存在するが、唯一異なるのは解離に関して CDS のみがパスを持つことである。これは SP が離人における感情反応と似た様相を呈しながら、離人の中核的な反応である解離反応を示さないことに、両者を分かつものがあると考えられる。

Table 1 EPSの項目内容

番号	項目内容
1	動揺した気持ちは、夜間の睡眠によって消失した。
2	身体の様々な感覚を鮮明に感じた。
3	漠然とした、あるいはぼんやりとした感情しか感じなかった。
4	自分の気持ちに関心がなかった。
5	なぜ自分がそのような気持ちになったのかを理解しようと努力した。
6	自分では望んでいない感情が、いやおうなく湧き続けた。
7	自分の気持ちについて考える暇もないほど忙しかった。
8	(テレビや雑誌の)不快な情報に注目しないようにした。
9	ある感情が1日以上続いた。
10	この1週間に「どんな気持ちを感じてきたか」と尋ねられたら的確に答えられる。
11	私は自分の感情と距離をおいて超然としていた。
12	気持ちが動揺したり腹を立てたりしているときに、発言をうまく自制するのは困難であった。
13	私の感情はとても混乱していた。
14	自分の気持ちか、本当の自分の気持ちであるとは思わなかった。
15	否定的な気持ちや感情について話すことは、否定的な気持ちや感情を強めてしまうと思った。
16	自分の感情を消し去ることを強く望んだ。
17	自分の感情は出来事によって生じたというよりは、身体の生理学的変化によって生じたものだった。
18	自分の感情を抑えていた。
19	人々の発言や行為に対して、私は過剰に反応した。
20	私は強烈な感情に恐れをなした。
21	自分がこころの病になったのか、あるいはただ感情的になっているのか判断するのが難しかった。
22	自分の気持ちには大きな空白があるように思えた。
23	愉快なことだけを話すよう努めた。
24	私は自分の不快な気持ちに耐えられなかった。
25	この1週間の出来事と自分の気持ちを関連付けることができた。
26	誰かに仕返しをしたくてたまらなかった。
27	どんな感情であっても、その感情を余すところなく感じるようにした。
28	自分の気持ちに気づいたことで、よりよい判断をすることができた。
29	感情を感じるべきときに、感情を感じるができなかった。
30	自分の気持ちを表現できなかった。
31	何かを打砕こうとする衝動を感じた。
32	自分の感情を鎮めることが難しかった。
33	なぜそのような感情が生じたか理由のわからない感情を感じた。
34	食べ物が感情の原因だった。
35	自分の気持ちについて誰にも話さなかった。
36	同じ感情を繰り返し感じる傾向があった。
37	自分の感情を封じ込めた。
38	私はとても理性的にふるまい、感情を表すことはなかった。

結 論

本研究では、離人とサイコパスに表れる感情鈍磨の違いを検討し、離人における感情反応がPPとSPの感情反応にそれぞれ対応づけられる可能性が示唆された。しかし、サンプル数が少なく健常大学生であること、EPSの信頼性、妥当性が十分に検討されていないことから、本結果が一般的であるとする根拠は薄く、結果の解釈には慎重さを要する。今後、より大規模な調査研究が望まれるところである。

引用文献

- American Psychiatric Association (2000). *Diagnostic and statistical manual of mental disorder*. 4th ed. Washington D.C.: The American Psychiatric Association.
- (アメリカ精神医学会 高橋三郎・大野 裕・染矢俊幸 (監訳) (2002). DSM-IV-TR 精神疾患の診断・統計マニュアル 医学書院)
- Apitzsch, H. (1996). Trauma and dissociation in refugee patients. *Nordic Journal of Psychiatry*, **50**, 333-336.
- Baker, R., Holloway, J., Thomas, P.W., Thomas, S., & Owens, M.

- (2004). Emotional processing and panic. *Behaviour Research and Therapy*, **42**, 1271–1287.
- Baker, R., Thomas, S., Thomas, P. W., & Owens, M. (2007). Development of an emotional processing scale. *Journal of Psychosomatic Research*, **62**, 167–178.
- Cleckley, H. (1976). *The mask of sanity*. 5th ed. St. Louis, MO: Mosby.
- 金山範明・大隅尚広・大平英樹 (2007). 現実世界からの逃走——離人症状の分類と回避傾向の関連について——パーソナリティ研究, **15**, 362–365.
- Levenson, M. R., Kiehl, K. A., & Fitzpatrick, C. M. (1995). Assessing psychopathic attributes in noninstitutionalized population. *Journal of Personality and Social Psychology*, **68**, 151–158.
- 大隅尚広・金山範明・杉浦義典・大平英樹 (2007). 日本語版一次性・二次性サイコパシー尺度の信頼性と妥当性の検討 パーソナリティ研究, **16**, 117–120.
- Osumi, T., Shimazaki, H., Imai, A., Sugiura, Y., & Ohira, H. (2007). Psychopathic traits and cardiovascular responses to emotional stimuli. *Personality and Individual Differences*, **42**, 1391–1402.
- Rachman, S. (1980). Emotional processing. *Behaviour Research and Therapy*, **18**, 51–60.
- Sierra, M., & Berrios, G. E. (2000). The Cambridge Depersonalization Scale: A new instrument for the measurement of depersonalization. *Psychiatry Research*, **93**, 153–164.
- 杉浦義典・佐藤 徳 (2005). 日本語版 Primary and Secondary Psychopathy Scale の妥当性 日本心理学会第 69 回大会発表論文集, 407.
- 2007.8.7 受稿, 2008.4.25 受理—

Depersonalization, Psychopathy, and Two Types of Emotional Deficiency

Noriaki KANAYAMA^{1,2}, Takahiro OSUMI^{1,2}, Risa IMURA³, Masao YOGO⁴ and Hideki OHIRA¹

¹Graduate School of Environmental Studies, Nagoya University

²Research Fellow of the Japan Society for the Promotion of Science

³Graduate School of Letters, Doshisha University

⁴Faculty of Letters, Doshisha University

THE JAPANESE JOURNAL OF PERSONALITY 2008, Vol. 17, No. 1, 104–107

Emotional process at times goes awry. For instance, depersonalization disorder includes emotional detachment, which is evoked sometimes by stressful events, just like a common symptom of acute stress disorder. Similarly, psychopathy is characterized by weak emotional responses. However, although they appear to have something in common, these phenomena are not completely the same, and each has some different function for or influence on behavior. We investigated the differences between emotional detachment in depersonalization and weakened emotion in psychopathy, using Emotional Processing Scale (EPS). Path analysis revealed that emotional malfunctions in depersonalization could be separated into dissociation, which was common with primary psychopathy, and suppression, uncontrollability, and confusion, which were common with secondary psychopathy.

Key words: emotion, depersonalization, psychopathy, primary and secondary psychopathy